

江戸時代の消防事情②

元東京消防庁

消防博物館長 白井和雄

○ 明暦の大火の火元の真相は

明暦3年(1657)1月18日、本郷5丁目裏の「本妙寺」から出火した「明暦の大火」は、江戸城本丸や天守閣を焼失させ、当時の江戸の町の大部分を焼き尽くし、焼死者107,000余人を出した。

「明暦の大火」は今日に至るまで、我が国における最大の火災で「江戸三大火災」や、「世界三大火災」の一つといわれている。

1 火災の概要

大火が発生した当時の江戸の町は、前年の11月以降一滴の雨も降らず、今日風にいえば「異常乾燥注意報」が発令されるような気象状況であった。

火災の概要は、『増訂・武江年表』によると、次のようである。

「正月十八日、乾大風未刻(午後10時)より本郷五丁目裏本妙寺より出火。湯島、神田邊、浅草御門内町屋、通町筋、鎌倉河岸、京橋八丁堀、pppAIA巖島、鐵砲洲、海手、佃島、深川に至る。(御成御本丸、御天主等炎上、西御本丸悲なし。)翌十九日巳刻(午前10時)過、小石川傳通院前新鷹匠町より焼出し、牛込御門、田安御門、神田橋御門、常盤橋御門、呉服橋御門、八代洲河岸、大名小路、藪寄屋橋御門等焼亡。

又同日番町(麴町五丁目つき)より火出で、半

藏御門の外、櫻田虎御門、愛宕下、増上寺門前札の辻海手迄焼亡。此類焼萬石以上の御屋敷五百餘宇。御簾本七百七十餘宇。但し組屋敷敷をしらず。堂柱三百五十餘宇。町屋四百町。片町八百町、焼死十萬七千四十六人といへり。依て本庄(本所)に二町四方の地を給ひ、非人をして死骸を船にて運ばしめ、塚に築て寺院を建て、國豊山無縁寺回向院と名づけしめ給ふ。

(去年十一月より當年正月に及ぶ迄、雨更になし。二十一日に至て大雪降。米價一時に登揚して賤民の困苦甚しく、道路に悲泣す。)

正月廿三日より七日の間、火災に逢ふて飢饉に及ぶ輩へ、所々に於て粥を給はり、又町中へ銀子一萬貫目(金にして十六萬兩、間ロー間に三兩一分と銀六匁八分つゝといふ。)を下し給はる。(囚獄の罪人を火事の時放たるる事は、この時より始れるよし。)

以上が火災の概要などである。

2 諸々の出火原因説

出火原因については、以下のような諸々の説がある。

- (1) 本妙寺失火説
- (2) 由井正雪一味の政治的謀叛による放火説
- (3) 本妙寺の南隣にあった、阿部豊後守忠秋の下屋敷から出火した火災を、本妙寺が火元を引き受けた、火元引き受け説

(4) 幕府が都市計画を実施するため、江戸の町に火を放った放火説

(5) 燈火による振袖供養説

3 明暦の大火の火元の真相は

本妙寺は「明暦の大火」が発生して以来 350 年近く、「火事は何処だ、丸山本妙寺だ」といわれ続けてきたが、平成 12 年 5 月、徳栄山本妙寺布教部が作成した、『本妙寺と明暦の大火(振袖火事・再考)』という小冊子の中で、明暦の大火の火元は、本妙寺であるという言い伝えは誤りで、火元は本妙寺に隣接した「老中阿部豊後守忠秋邸」であると記して、汚名を晴らして、小冊子が指摘した点は、次のようなものである。

「阿部邸は本妙寺の隣りにあったが、檀家でもないのに“明暦の大火”の翌年から毎年、大火への回向供養料として、米の寄進が幕末まで続いた。

明治維新後は、米を金に代えて続けられ、大正 12 年(1923)の“関東大震災”を境いに終わったが、阿部家は本妙寺に対して、実に 270 年近くの長きにわたって、供養料を送り続けたことになる。これは本妙寺に火元を引き受けてもらったことの証しである。」と記している。

本妙寺が江戸時代にあった本郷 5 丁目から、今日の豊島区巢鴨 5-35-6 に移ってきたのは、明治 43 年(1910)のことである。



明暦の大火の供養塔 (本妙寺)

4 大火後の防火対策

明暦の大火を契機として、次のような防火対策が講じられた。

- (1) 区画整理を実施するため「建築制限令」を公布
- (2) 江戸城内にあった武家屋敷を、江戸市中に移転
- (3) 常時燈明等の裸火を使用している寺社を、江戸の郊外へ移転
- (4) 火除地・広小路の設置(下谷“上野”広小路・両国広小路・浅草広小路)
- (5) 茅葺・藁葺屋根の土塗り、瓦葺屋根ならびに土蔵造りの奨励
- (6) 両国橋の架設
- (7) 定火消の創設(江戸城の防火)

明暦の大火以前は、江戸城を防備するために、隅田川には千住大橋しか架けられていなかった。

このため明暦の大火の際、川向うの本所・深川方面に避難することが出来ず、数多くの人達が焼死したことから、大火後、本所・深川方面の開発に合わせて、万治 2 年(1659)に隅田川に「両国橋」が架けられた。

また、神社仏閣の燈明が、火災原因となることが多かったため、江戸の町の中心地にあった寺社は、浅草、駒込、三田など郊外に移転するよう命じられた。今日これらの地に神社仏閣があるのは、この時の名残りである。

以上のような防火対策を講じたことから、幕府の財政は逼迫し、徳川家康から引き継いだ財産のほとんどを、使い果たしてしまったといわれている。

このため明暦の大火によって焼失した、江戸城の天守閣の再建はなされないまま、江戸幕府は幕を閉じた。

5 振袖火事

「明暦の大火」は、別名「振袖火事」といわれている。それは「明暦の大火」の火災原因が、振袖にまつわる因縁話によることからである。

この話を矢田挿雲氏は『江戸から東京へ』という書籍の中の「本郷区」という項で紹介しており、これを要約すると次のようである。

「麻布百姓町の質屋遠州屋彦右衛門の一人娘”梅野”16歳は、承応3年(1654)3月、母親に連れられて菩提寺へ参詣した帰り道、上野山下にさしかかった時、擦れ違って山内に入っていった

寺小姓風の美少年に、一瞬のうちに心を奪われてしまった。

それからというもの梅野は、小姓が着ていたと同じような振袖を造ってもらい、これを枕にかつらを付けたものに着せて、日々夫婦遊びばかりするようになった。

心配した両親は四方八方手を尽くして、小姓を探し出したが、どうしても見付からぬまま梅野は翌明暦元年(1655)1月16日、17歳の若さで小姓を恋い焦がれて死んでしまった。

遠州屋では葬儀が済んだ後、夫婦遊びをしていた振袖を本妙寺に納めた。住職はいつもと同じよ

うに振袖を古着屋に売り払った。

ところが翌明暦2年(1656)梅野の命日に、上野山下の紙商大松屋又蔵の娘”きの”17歳の葬儀があり、この時”きの”が着ていた”梅野”の振袖が、再び本妙寺に納められた。

住職は”梅野”の振袖を再び古物商に売り払った。

翌明暦3年(1657)1月16日、本郷元町の麴商喜右衛門の娘”いく”17歳の葬儀で、みたび”梅野”の振袖が寺に戻ってきた。

このたびばかりは住職も、梅野の振袖にまつわる妾執に畏れを感じ、3人の娘の両親を施主にして、明暦3年1月18日本妙寺において大施餓鬼を行った後、梅野の振袖を燈火に投じて焼くことにした。

振袖を燈火に投じたその時、一陣の竜巻が燈火に向って舞い下がり、裾模様に火が付いた振袖は、あたかも人間が立ち上がったような形になって、本堂の真上に吹き上げられたことから、雨霰と降る火の粉で本堂に火が付き、周辺へと燃え広がっていった。」

以上の事柄によって「明暦の大火」が、別名「振袖火」といわれる所以である。